



その小屋は、麓^{ふもと}から離れた場所にあった。

そもそも人が立ち入るような山ではないため、ここに小屋があることを知る者はいないだろう。



お世辞にもきれいとはいえない外観だが、家としての機能はしっかりと果たしているようだ。

雲が多いせいか、月明かりが遮られ、辺りは暗い。

唯一の明かりといえば、小屋から漏れる、小さな小さなろうそくの炎だけだった。



そして君と
タイトルを



声に驚き、一步下がると床に落ちていた血を踏んだ。
開きかけた扉はゆっくりと閉まっていき、持っていたろう
そくの火がかすかに揺れる。

「けがを、してるんですか？」

「放っておいてくれ」

「そういうわけにはいきません。見せてください。もしひ
どいようならお医者さんを……」

「いい」

「でも」

「いいんだ。君は、ここに住んでるの？」

「——はい」

扉越しの会話は続く。

「そう。すぐに出ていく」

「血が滴^{したた}るほどのけがをしてる人がなに言ってるんです
か」

「すぐ治る」

「本当にそうなら無理せずここにいてください。その……
どうしても見せてくれませんか？」

「ああ」



「わかりました。無理に見ないし、この扉も開きません。
だから、せめてあなたのことを教えてください」

「……」

「私はマリー。あなたは？」

「……スミレだ」





「スマレはどこをけがしているんですか？ どうして、ここにいますか？」

「それを聞いてどうするの」

「扉越しでもなにかできることがあるんじゃないかと思って」

「声を聞く限り、マリーは若いだろう。できることがあるとは思えない」

「これでも多少の医学は学んでいます。お料理も、少なからできます」

それから、スマレの返答はなかった。

まだ質問に答えてもらっていないし、このまま彼を放っておくこともできない。

私はもう一度話しかけた。



(自由 RP マーク)

「とりあえず、ご飯を作りますね」



返事はない。

私は調理台をきれいにしてから、簡単なお飯を作った。

野菜スープに切った果物、ちょっと固いパン。

外にあった井戸から水を汲み、お湯も沸かした。





ボウルに入ったお湯、きれいなタオル、ご飯を乗せたトレイ。

それらを扉の前に置き、トントントンとノックをする。

「ご飯と体を拭くためのお湯を用意しました。扉の前に置いてあります。私はロフトへ行きますから、よかったらどうぞ。……おやすみなさい」

ドア越しに伝えると、扉から離れ、ロフトへの階段をのぼった。

彼と同じご飯を食べ、ロフトにあるベッドに横になり、この日は眠ったのだった。



を押して、次のシーンへ進んでください。

